坂林

SAKABAYASHI

随筆特集

至高の陶酔

金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

230余年の伝統の技が贅をつくした「煌」きらめき

讃岐の金毘羅酒として親しまれてきました金陵が、酒づくりの贅をつくしておくりだした清酒「煌」。金陵の歴史は、今をさかのぼること二三〇余年の寛政九年。当主八代目であった西野嘉右衛門が、金毘羅さんの麓ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉を分け、その丹精こめた手づくりの味わいは、金毘羅詣での人々からも広く親しまれてきました。

清酒「煌」のえも言われぬ風味をとくにには、金陵の心意気と酒づくりひとすじの神髄が細やかに息づいています。

真珠玉のごとく搗きあげ
水晶のごとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

清酒「煌」に使っているのは、酒造好適米の中から選びぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、米粒よりやや大きい、玄米のわずかな割ほどの、まるで真珠玉のような芯だけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返しくり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。

昔から「一麹、二酛、三、造り」といわれているとおり規雑多岐にわたる工程を熟達の杜氏が一つ一つをなしていく。杜氏は寒中夜も眠らず、我が子を育てるように精魂をこめ、枝の限りをつくして低温でこっくりつくりあげる。

こうして、清酒のアルコール分、旨味を米だけから造り出した、手づくりの微妙精緻な「煌」が誕生させたのです。

芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのさ、まさに清酒の芸術品。この稀なる清酒「煌」を、日本酒をこよなく愛するみなさまにじっくりと味わいつくしていただきたい。

ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

税込

煌 きらめき 金陵 超特撰

標準価格 1.8ℓ 10,800円 720mℓ 5,400円

西野金陵株式会社 香川県仲多度郡琴平町六二三 電話(〇八七七)七二-四二三三

未成年者の飲酒は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒は気をつけましょう。

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集

第97号

酒林

SAKABAYASHI

随筆特集

己亥元旦　山西無聞……4

半歩下がって歩きましょう　杉本忠夫……6

サンドイッチ　内野潤子……8

絵と文▨　色彩のチャンプルー展　佐川毅彦……10

ジョー・スタンカの思い出　池井優……12

上原勇作元帥とその妻　宮地智子……14

教えられたり、酒を飲んだり　志村有弘……16

一種の統一（ユニテ）が先づ（ま）与へられてゐる　志村栄至……18

絵と文▨　ユーカリ　中西美子…21
ああ、市民講座九十　高橋和島…22
あるのか、ないのか　片岡義男…24
おふくろの味　山本千明…26
一冊の本との出合い　宮本富夫…28
ほろ酔い詩歌紀行――続・狂歌師列伝　日高昭二…30
絵と文▨　ウィーンで開催されていた二十一世紀ジャポニズム展　さかもと　ふさ…32
マルクスの不倫（中）　池田一貴…33

表紙・グラビア…屋嶋城（やしまのき）

己亥元旦

猪突道途難
魚行濁水安
大隠潜朝市
壺中天地寛

猪突　道途難く
魚行　濁水に安んず
大隠は朝市に潜み
壺中　天地寛し

山西無聞

今年の干支は己亥なので、今年も「いのしし」にちなんだ五言絶句を記載して年賀状を送ることにした。

「いのしし」を表す当用漢字は「猪」であるが、旧字は「猪」で、本字は「豬」である。「豬」の文字は解字によれば、「形成文字、意符の豕（ぶた）」と音符の者（シャ　ちいさいの意）とから成る。小さい豚の意、転じて野生の豚「いのしし」の意に用いる。）とある。「猪」の字も「いのしし」のほか「いのこ」とも読まれ、これは豚及び猪をいい、「豬」の文字は「いのしし」にも「ぶた」にも共通して用いられるようである。

「猪も七代目にはいのこになる。」ということわざもあって、これは一見変わらないように見えても、長い年月にはそれなりに変化していくことのたとえに使われる。

「己亥」については「己亥河を渉る（つちのと　いの日に河を渡るの意味）」という文書を「三豕河を渉る（三匹の豚が河を渡るの意味）」と読み

間違えた「亥豕の譌」という話が伝わっている。「己」を「三」と読み、「亥」を「豕」と読み間違えたもので、活字のない時代の筆記された文字なので、読み間違いや書き写しの間違いは多々あったようで「虚虎の誤り」「焉烏の誤り」「書三写、魚は魯と成り、帝は虎と成る。」といった言葉がある。

さて、詩の意味であるが、起句の「猪突」は「いのししのように、まっしぐらに進むこと」、最近は野生の鹿や猪が山から人里に下りてきて畑の作物を食い荒らすことが多いという。更に町の中にまで進出して人を襲うこともあるという。実際はどうか知らないが、猪が走り出すと容易に方向転換が出来ないので、闘牛士のように横向きに逃げればよいと聞いた覚えがある。「道途難し」は人生行路を生きて行くのは難しいということ。猪突猛進でまっすぐに進むことは決して悪いことではないが、進む方向が問題である。

承句は「水至って清ければ、則ち魚無し。人至って察なれば、則ち徒(ともがら)無し。(孔子家語・入官)」を踏まえたもので、澄み切った水中では、魚は身を隠す所がなくて棲みつかない。人間も清廉潔白すぎると近寄り難く、敬遠されるということである。なお、碧巖録にも「魚行けば水濁る」の句がある。

転句は「小隠は陵藪に隠れ、大隠は朝市に隠る。(王康琚・反招隠詩)」を踏まえたもので、これは、「世を逃れてはいるが、まだ徹底していない隠者(小隠)は丘や草木の茂った人里を離れた所に隠れ住み、悟りきった隠者(大隠)は山林などには隠れず、かえって朝廷や市場のような人の多く集まる所に隠れている。」ということである。

結句は、「後漢の費長房なる者が、市場の役人をしていたとき、壷公という薬売りの老人が、商売が済むと店頭に掛けている壷の中にいつも飛び込んで姿を消した。費長房がその老人に頼んで一緒に壷の中に入れてもらうと、中には宮殿があり、酒やさかなのたくさんある別世界であった。」という話による。「壺中の天地に寛(くつろ)ぐ。」と読んでもよい。

漢詩は、起句と承句を反法(隣り合う二句の対応する二・四・六文字目の平仄を違えること)、承句と転句を粘法(隣り合う二句の対応する二・四・六文字目の平仄を同じにすること)、転句と結句を反法とすることを原則とするが、本詩は承句と転句も反法の拗体の詩である。また、起句にも韻を踏んだ寒韻の詩である。

今年は、「いのしし」年ではあるが、猪のように突進しては世間とはうまくやっていけない。なかなか難しいことではあるが、清濁を併せ呑むほどの度量の広さを持って世間の人々との折合いをつけるとともに、自分だけの世界も大切にしてこの一年を過ごしたいと思う。

半歩下がって歩きましょう

杉本忠夫
（虎の門病院 内分泌代謝科 非常勤嘱託医）

本年は改元の年です。どのような元号になるのか楽しみです。また、来年はお年寄り始め国民が待ちに待った国の威信を懸けた東京オリンピックが開催されます。そこで、運動について老いては子に従えのお話をしてみましょう。

では、幼児の日常生活をみてみましょう。幼児達が公園でお砂遊びなど楽しそうに遊んでいる時、お母様が約束の時間がきて帰りましょうと言っても、なかなかお友達と遊びに熱中していて帰ろうとはしません。しかしながら、あちこちと遊びまわって疲れ果て、いざ帰る頃になるとお母様方を困らせます。というのは、直ぐに抱っこしてほしいと駄々をこねるからです。いままで元気に遊んでいたのに、連続して歩くことになると四、五歩も歩かないうちに抱っこをしてほしいとせがむことが多いようです。これは、幼児の心臓が継続的に運動をすると脈拍数が上がってしまい、負担が多くなり過ぎることによると思われます。

ところで、幼児の心臓の拍動数は早いことはよく知られています。大体一分間に九〇～一一〇回ぐらい、呼吸数は二〇～三〇回と言われております。ところで、体温が一度上がる毎に脈拍数は一分間に一〇㎜／Hgずつ上がっていきます。したがって、幼児の心臓の拍動数が連続的に歩くことによって普段より早くなることは、心臓にとってかなりの負担になると思われます。

そこで、遊び疲れた幼児は女神のように見えるお母様に救いの手を求めてきます。つまり、お母様に抱っこを要求してくることになるのです。女神の手が伸びてきて抱っこをしていただくとその腕のなかでニコニコしています。

ところが、この女神の腕が伸びてこない幼児は泣きわめいてお母様の抱っこを要求してきます。そして、抱っこしていただくと駄々をこねていた泣き顔が途端に今までところっと変わってニコニコと笑顔になってきます。抱っこされた後、遊び疲れた子供はウトウトと寝入ってしまうのです。

はなしは変わりますが、最近高齢な方が毎年増えて、高齢化社会といわれて久しくなります。高齢なお年寄りのなかでも特別元気な方がいらして、TVコマーシャルでは鉄棒体操で若者でも難しい大車輪を見せていただいたことがありました。また、毎日早朝より元気に一時間以上の散歩をされている闊達としたご老人がいらっしゃいます。その歩く早さも若者並で一分間に一二〇歩以上の早足で歩かれます。それに加え、歩かれる前後に自己流の体操をしている元気なお年寄りもいらっしゃいます。

しかし、一見健康そうにみえても、その裏には心臓や骨粗鬆症などの病気をお持ちの方が沢山おられます。このような方々の中には、不整脈つまり、心房性期外収縮、心室期外収縮、心房細動や狭心症など循環器系などの心臓の病気をお持ちの方がいらっしゃいます。普段、元気に生活しておられますが、何か身体に少しの負担が掛かると息が切れてきます。

これらの病気を持っている方は歩く時、ご自分のペースで歩かないと脈拍数が上がってハアーハアーと動悸が始まります。やがて、胸が苦しくなってきます。重症な時には、脈の乱れが生じて救急車のお世話になることもあります。したがって、発作が出ないようにご本人はもちろんこと、周囲の方にも細心の注意が必要となります。

また、軽く転倒しただけでも、お年寄りにありがちな骨粗鬆症による大腿骨の骨折などを引き起こすこともあります。

このように、お遊びの幼児と高齢者は同じ状況にあり運動時には特に注意を払うことが必要です。

高齢者と連れだって買い物やウインドウショッピングする時、半歩控え気味に歩いていただくことをお勧めします。高齢者の方は真面目な方が多いので、つい遅れまいとご自分の病気を忘れて、おつれの若い方に歩調を合わせようとしてしまいます。そこで、お年寄りと歩くときは心房細動などの頻脈発作を来すことがないようにしましょう。

また、お年寄りがこれくらいと思って少し無理をして歩くと、狭心症をお持ちの方では恐しい心筋梗塞の引き金を引いてしまい、強い胸痛を伴った心筋梗塞の発作を引き起こすことがあり注意が必要です。

今お話ししてきたように、高齢者と連れだって歩くときは、半歩下る気持ちで歩くことが、不整脈、頻脈発作、心筋梗塞などを避ける最善の方法です。

改元々年、遊び疲れた幼児は女神の腕の中で、また、高齢者と一緒に連れ立って歩く方々は半歩下る禅譲の気持ちが大切です。

サンドイッチ

内野潤子
（歌人・エッセイスト）

私の卒業した小学校は、池袋駅の近くにあった、豊島師範の付属小学校である。今は芸術劇場となった所に豊島師範があった。

近くに小学校があったのに、母は少しでも優秀な子供の集まる学校に入れたいと、応募させたのだった。

入試といっても住所氏名など簡単な質問で人員の半分をおとしあとは抽選だった。兄が入学できたので私もと母は受けさせたが、上の四人妹も弟も合格できた。

学校は校庭も狭く、各級に師範の学生が級の教育に加わるということだった。

学校の奥に、小さな賣店がありお昼になると、パンを売っている。店主の人は着物を着た小父さんで、お弁当の人は行かないが、パンの人は買いに走った。

私も今日はパンねと、代金をもらって買いに行ったが、チョコレートパンやクリームパンは一個五銭だったと思う。

サンドイッチもあったが、今のようにハム玉子などぜいたくなものはなくて、ポテトサラダだけであった。子供はやはり甘いパンを買う人が多かった。

級の中に一人、ハムサンドをお弁当箱に入れてもってくる人がいて羨ましかった。家でサンドイッチを作るときはキュウリだけだったし、当時の家はみな同じのくらしだった。

土曜日は半日でお弁当がない。バスで帰る私は空腹で、売れ残りのサンドイッチを求め、バスの中で手でうしろにかくし、一口ずつポテトサンドを食べたのが、忘れられないおいしさであった。母には言わなかった。

子供六人と祖母二人、両親の大家族で、台所は父方の祖母がすべて仕切っていた。

当時は卵は貴重品でお弁当のゆで玉子も半分ずつだった。

友達は軍人の子供が多かった。みんな定期を胸に下げて池袋駅まで電車通学の人が多かった。一人仲好しの友は、当時の流行歌の徳山たまき

の「とんとんとがらりんの隣組」の娘さんがいて、さっぱりとした明るい人だった。お弁当を買うのに朝一緒についていくと駅の先に一軒あったパン屋さんで蟹の形をしたパンに、ジャム・バター・クリーム・あんこまで塗ってもらって買うので私は驚いてしまった。彼女は後に明治高校の音楽の教員になった。歳月を経て、昭和二十年ようやく長い戦争が終り、十七才の私はやっと学徒動員の工場から開放された。父が自由業の私は食べるのに苦労した。二十四年に結婚して専業主婦の毎日、次第に食料品も出廻りはじめて一男二女の母となった。

小学生になった子供の誕生日には、友だちの五、六人を呼んで小さなパーティーをした。

その時は、食パン四斤位のサンドイッチを作った。その頃にはもうピーナッツバターやいちごジャムもあり卵のサンドイッチ、ハムもポテトサラダも豊富にあり、それにオレンジジュースが定番だった。

子供たちは喜んで食べ、又遊びまわっては食べ、山のようなお皿はだんだん空になり、終ると、パセリのみとなる勢いだった。

三人の子の小学生時代が終り、それでも当時のことを思い出して下さる子供の友人たちがいるのはうれしい想い出である。

現在、私の家も同居の孫の一家に曾孫がいて、クリスマスは孫のサンドイッチを、家族みんなで食べている。

恒例のお花見も、すぐ近くの公園でする時、孫がたくさん作ってくれる。

今のものは一組のパンにハム、チーズ、トマトなど中味の方が多いというぜいたくなもので私もいなりずしや、おむすび、玉子やきなど作ってビニールの敷もの一ぱいに並べてたのしいひと時をすごす。

花びらの降る中でする宴は、この世ならず彼の世のように思われる。

九十もの私は車椅子に坐っていつもそんな幻をいだいている。小学生時代の友人もみな彼の世に移り住んで、サンドイッチ一つにも次々に思い出が広がってくる。

高齢の私は、どちらかといえば、パンよりお米が好きで、近くのお米屋さんが自宅のお米でつくるおむすびを売りだし、それがとてもおいしい。のりをまいてずっしり重いようなおむすびは毎日食べてもあきない。

娘は、「早く行かないと売り切れになる」といって起きてすぐ行ってくれる。

中は梅干しそれも小さい梅干しで、あとはさけや、たらこや、こぶの佃煮などでお米にぴったりなものばかり。

明治生まれの祖母も、よくこのようなおむすびをにぎってくれた。

お味噌をまぶしたのもおいしかった。

女学生の頃、夜半お腹がすいて、妹と二人で、おひつの中のごはんで大きなおむすびをつくりお味噌をたっぷりつけて、「おいしいね」と笑いあったことも忘れられない。

私より二才下の妹は昨年八月に彼の世に、私を残して逝ってしまった。

色彩のチャンプルー展

佐川毅彦

沖縄で年二回ぐらい、絵を発表しているが、金がかかる。

友人の稔が県立芸大の財団法人で、芸術文化活動に助成金がでるというパンフレットをもってきた。個人ではダメだが、数人でやる場合には助成金がでるらしい。さっそく申請書を書いて、財団法人にもっていった。ひと月ぐらいして、二十万円、金が降りる事になった。参加者を集めなければならん。

稔が、（彼は沖縄では少しは名の通った画家で、画廊も経営しておった）俺のひと声で、二、三十人はすぐ集まるから、適当に五、六人連れてくればいいだろう、まかしてくれという。しかし、あくまで主役は私である。ほかのメンバーは助成金のための頭数である。たくさん作品をもってきたら困る、大きくない作品で一人二点ぐらいにしてくれと、強く念を押した。

さて、メンバーは七人、私と息子の毅志、稔、一正、亘、幸子、栄一（故人）。

稔はCGの作品で体はロボットで顔はなじみのスナックのママ、もう一点も、ロボットに好きなホストの男の顔という、気味の悪い作品である。

元看板屋で今は観光客用にシーサーを作って、大もうけをしている一正はリアルな絵が得意でオードリーヘップバーンとモンローをもってきた。

そして稔の古い知人の居酒屋のバアさんの亭主の弟、栄一（これは二十年前に亡くなっている）彼の残した油絵を五点展示した。

さて、亘、この男、ズーズーしくも、畳、二畳ぐらいの作品を二点もってくるという。しょうがない、参加を認めたのは私である。ところがトラックでなければ作品は運べない。業者に頼んだら二万円かかるという。助成金は出せない。あきらめて、小さい作品をもってくることになった。良かった。

さて幸子という女だが（本人は幸姫と呼べというとる）展示場は天井から四メートルの高さがある。自分の写真を4メートルのたれ幕四枚に印刷して、四方からたらして、真ん中にとんがりのある大きな塔を建て

ている。なんなんだ、これは。ワケがわからん。

さらに幸子は毎日、ハデな和、洋服に着がえて、ヘアースタイルも服に合わせて変化させて、私自身歩く芸術作品として、会場をウロウロするという。なんともはや、展覧会の費用がタダですむからまあいいか、と納得するしかなかった。

ちなみに、チャンプルーというのは沖縄の家庭料理で、いろんな具をごっちゃまぜにした野菜いためのことである。

ジョー・スタンカの思い出

池井　優
（慶應義塾大学名誉教授）

外国人選手を追って

「かって日本のプロ野球で活躍した外国人選手を追ってくれませんか」

文藝春秋から依頼があったのは、いまから二十年以上も前のことであった。一九五〇年代から六〇年代にかけて、日本のプロ野球各チームは外国人選手を積極的に入れはじめた。即戦力と日本人選手にないパワーを期待しての採用であった。さまざまな外国人選手が日本にやってきた。一九六四年の東京オリンピック前の日本は、外国人選手にとって住みやすい国ではなかった。飛行機はプロペラ機、トイレはほとんどが和式、球場は汚く、英語が通じる場所も限られていた。したがって、期待されながら、日本の水になじめず、みじめな成績しか残せず、お互いに傷ついて帰っていった選手も少なくなかった。

文春からこの話がきたときこう考えた。彼らが現在どういう生活をしているのか、日本時代の思い出をどのような形で残しているのか、それを知りたい。彼らの住所を調べ、訪れて話を聞きたいと手紙を出した。真っ先に返事をくれたのはスタンカだった。

スタンカはオクラホマの生まれ、背が高く、はじめバスケットボールをやったが、野球に転向しマイナーリーグからスタートした。一九五九年ようやく大リーグに昇格、ホワイトソックスの一員となったが、一勝をあげただけでマイナーに降格。早く結婚し二人のこどもまでいたスタンカは野球を通じて家族を養う手段として日本でプレーする道を選んだ。

運命の一球

一九六〇年、南海ホークス（現ソフトバンク）に加わったスタンカは期待に背かぬ働きをした。一メートル九十六の巨体から繰り出される重い速球を武器に入団一年目からエース杉浦を助けて十七勝をあげ、優勝こそ逃したものの、その働きなくして南海の二位躍進はなかった。二年目を迎え、途中で故障した杉浦に代わるスタンカの力投で南海はリーグ優勝、セリーグの覇者巨人と日本シリーズを戦うことになった。巨人二勝一敗で迎えた第四戦、九回表土壇場で二対一と逆転した南海。その裏二死満塁の場面でスタンカが打席に迎えたのはエンディ宮本で

あった。ボールカウント、ワンボールツーストライクと追い込んだスタンカ、野村のバッテリー。第四球、決め球のフォークボールを外角に落とした。宮本のバットはピクリとも動かない。見逃し三振と思った瞬間、球審円城寺はボールを宣告。とび上がったスタンカは顔を真っ赤にして抗議する。キャッチャーの野村も「えっ」といった表情で振り返り、完全なストライクなのにと文句をつける。しかし、判定は変わるものではない。興奮のさめやらぬスタンカは次の一球を外角高めに投じた。宮本のバットが一閃、白いボールはライト線に飛んだ。三塁ランナーにつづき二塁ランナーもホームイン、二点を奪って絵に描いたような巨人の逆転サヨナラ勝ちとなった。この一戦の敗北が転機となって南海は二勝四敗でこの日本シリーズを失った。

ヒューストンの自宅の居間には、日本人の商社マンが置いていったという色紙が飾ってある。「円城寺、あれがボールか秋の空　詠み人知らず」。

日本シリーズに連投

一九六四年、東京オリンピックの年、日本シリーズは関西球団阪神対南海の「浪速シリーズ」となった。阪神は村山、バッキーの二枚看板、南海はスタンカを中心に動脈閉そく症の手術から回復した杉浦がいたが、もう往年の力はない。阪神三勝、南海二勝で迎えた第六戦、なか四日で休養十分なスタンカは阪神打線を寄せ付けず三―〇で完封勝利、三勝三敗となって泣くも笑うもあと一勝の第七戦に持ち込まれた。

「誰に投げさせるか」、鶴岡監督は悩んだ。コーチがいう。「ジョーでいきましょうや」。

「ガイジンゆうたら連投なんかせんぞ。けど頼んでみるか」。鶴岡監督の頼みをスタンカはＯＫした。「連投の経験はありません。六回位までいきますから、リリーフを用意しておいてください」。「ジョーが連投するさかい。はよ助けてやれ」。奮起した南海ナインは村山を攻略し、三点を先取、この三点をスタンカは守り抜いた。前日につづき、三―〇で再び完投して完封。六戦、七戦と阪神に一点も与えず、南海を日本一に導く大活躍だった。当然、スタンカはＭＶＰに選ばれ、トロフィー、テレビ、車など山のような賞品とともにカメラの放列を浴びた。

スタンカが連投を辞さなかった裏には、当時の鶴岡監督と南海ナインの普段からの接し方にあった。決して「ガイジン」とか「助っ人」といった目でみることなく、家族を含めチームの一員として温かく接していたのだ。「あの頃のチーム全員にはハートがあった。だから自分も日本人的犠牲の精神を学び、連投をＯＫしたんだ」。

ヒューストンを訪れた際、自宅に泊まれといってくれ、シャワーを浴びたあと、なんと日本から持ち帰った浴衣姿で思い出を語ってくれるスタンカだった。

鶴岡監督が「あんたは目は青いが性根は日本人や」と激賞したスタンカもつい先ごろ八十七歳の生涯を終えた。

上原勇作元帥とその妻

宮地智子（詩人）

大正十年秋に英国留学から帰国した今村均陸軍大将（当時大尉、一年後に少佐に進級）は、参謀本部総務部第一課勤務の傍ら、上原勇作元帥の副官として勤めることになった。

参謀総長の職を辞し、軍事参議官となった上原元帥の自宅を隔日に訪れることになり、自然と上原夫人とも顔を合わせるようになったのである。

『今村均大将回想録』の第二巻冒頭では、〝雷おやじ〟と恐れられていた上原勇作元帥の、部下に対する厳しさや、軍事を超えた高邁な精神のありようは、つまるところは日本の国のあり方を深謀遠慮するがための心ばえであったことを余すところなく描いている。

一般に、上原勇作元帥が、日本軍国主義の元凶のように言われていることに疑問が湧いてくるのである。

私が最も深く胸を打たれたのは、元帥を支えた上原夫人のことである。

上原元帥は少年時代、宮崎県都城の旧藩主島津嗣子の指導役学友として、共に鹿児島の造士館に学んでいたが、東京に出て勉強したい気持ちが強かった。明治四年、十六歳のとき、都城を脱し、東京へ向かうべく家出をしたものの途中で捕えられたりしている。

結局のところ、薩摩出身、野津道貫少佐（後の元帥）の家の書生となって、大学南校に通い、その頃、野津家に女の子が生まれる。上原少年十八歳のときである。その赤ん坊の子守りをしながら勉学に励み、陸軍士官学校へと進む。

その後五年間をフランスで過ごし、帰国した上原青年は三十歳となり、赤ん坊だった女の子は十二歳。その頃から少女は上原青年を慕うようになるが、一方、上原青年は唯ひとすじに軍事研究に専念、趣味といえば読書のみで、少女の気持など一向に解さない。

野津将軍の長女は年を重ねるにしたがい、完全に恋のとりこになってしまったのである。

旧薩摩藩の先輩たちは、書生として世話になった家の娘なのだから、と、無理矢理に、二人を結婚させてしまったのである。

当時三十六歳と十八歳の二人のうち、花嫁の方は願いが叶ったわけだが、花婿の方は、義理にからまれた不本意の結婚に割切れなさを抱きつつも、二男三女をもうける。

今村大将が見た二人の関係は一風変わっていて、元帥と夫人とは全く言葉を交さず、何か用があると、紙に用件を書いて、それを女中さんが取りつぎをする。例えば元帥が、「今日は誰それのところを訪問。午後四時には帰る」と記してやると、「和服はこれこれにいたしましょう」と返事を書いてよこす、という具合に。

ところが、大正十四年後半期頃から、胸を悪くした夫人のため、千葉県一の宮の海岸に居を移し、自身も夫人のために介抱をするようになるのである。夫人が療養生活を快適にするために様々な工夫をする。例えば、単調な海岸の景色ばかりでは飽きるだろうからと、庭に小山を作って、見たいときに、そこに登って海が眺められるようにする。

夫人の病室と自分の部屋との真中に囲炉裏を作ってそのそばに机や椅子を置いて読書をする。

余命いくばくもない、と医者から告げられた上原元帥は、雷に打たれたような衝撃を受けた、と今村大将に告白する。唯々、己れのみに捧げた夫人の、純なる恋と愛とがはっきりと認識され、これまでの自分の夫人に対する薄情さに罪悪感を覚えたのであろう、と今村大将は言う。

死の十日前、夫人は今村大将を病室に呼んで二人きりになると、「あなたはうちの主人のことをどう思います。どうか本当にお感じになったことをおっしゃって下さい。」と言う。

今村大将は答える。「陸軍の多くの人は、元帥の本当の心を見得ないで〝かみなりおやじ〟などと言いますが、私もはじめはそう思っていました。今はもう違います。山の高い所では雷鳴をならしますが、麓にはいつも作物に良い雨を降らせているのが元帥です。」

夫人はこれを聞いて目を輝かし、痩せた頬を紅潮させながら語るのである。

「まあ、あなたは良く見て下さっている。私はもの心ついて以来、こんなに立派な男性はないと、心の底から信じ、また愛しました。

私にもたびたび雷が落ちましたが、病気になってからの私に対するあの人の親切、私を愛している気持……。それがいま、はっきりとわかります。愛した人からこんなにも愛されて、私のように恵まれてこの世を去る人間はそんなに多くはないのではないでしょうか。私は本当に喜びをもってこの世を去るのです。」

これに応えて今村大将もまた、このように語りかけるのである。

「奥さんの喜びは私にもわかります。なぜなら、前にこわいと思った元帥が、今は私の父親ででもあるかのようになつかしく感じられます。生きていれば私の父も元帥と同じ歳です。まもなく元帥も帰って参られましょう。失礼します。」

そう言って病室を出た今村大将が、後に、遠く離れた戦地で、幼い三人の子を残して病死した妻をどれ程哀れに思い悔恨の念に苛まれたか、誰が予想しただろうか。